

名大の授業（インターネット版）

文系基礎（地理学）火曜1限（2006年前期の講義をもとに）

テーマ「インド・いちば・フィールドワーク」

● **講義目的**：新一年生用の地理学の講義では、いきなり南アジアに連れていくことにしている。

近くて遠いアジアの中でも、南アジア諸国（インド・バングラデシュ・ネパールなど）となると、気候、人種、言語、そして社会システムなど総てに於いて異質である。そんな国々から名古屋大学への留学生も増えつつあり、キャンパス内で彼らと接する機会も増えてきた。その一方、名古屋大学の学生は欧米、あるいはアジアのなかでも中国・韓国・東南アジア諸国へは留学、研修に数多くでかけるものの、南アジアへはほとんど足をむけない。こうした状況の中で、少しでも南アジアを知り親しんでもらうことを本講義の目的とする。

定番の教科書を使い解説するといったスタイルはとらず、私が1977年以降4半世紀にわたって十数回訪問した際の記録、写真、ビデオなどを用い、とくに学生さんたちと同世代の若者がいかなる生活をしているのかという点に注目して、南アジア諸国カースト社会のウラ・オモテを臨場感あふれた形で伝えることに努力している。

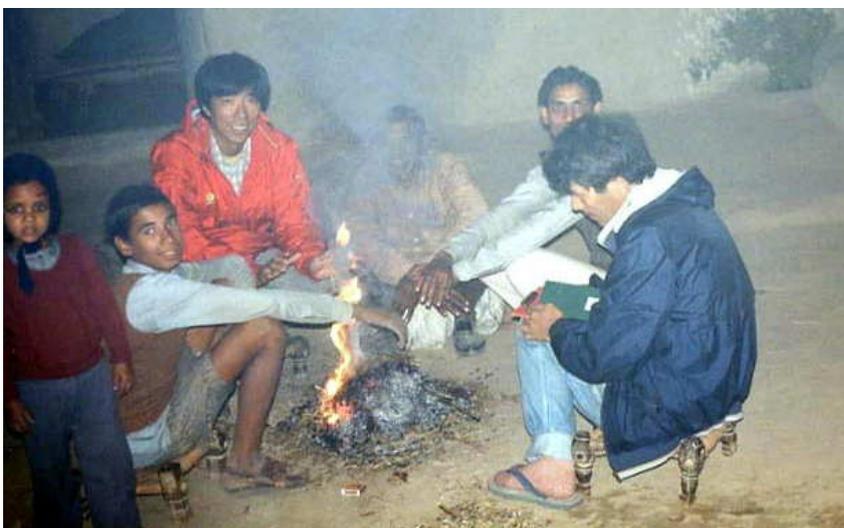


写真1 北インド・ロダウラ村、バジュパイ家の中庭で、焚き火にあたりながら聴き取りをする筆者（赤い服）。

1989.12.8

● 筆者の南アジア研究の基本姿勢

・ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が混住する南アジア社会で、かれらが、時には争ったりするであろうが、いかに仲良く暮らしているかを日常生活レベルで明らかにすること。

・筆者の専門は日本近世・近代の地域史研究であるが、南アジアの現在をフィールドワークすることにより、時間と空間を超えた比較地域環境史研究の構築を目指している。

第1回 ガイダンス

● 講義概要

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：インドの気候
- 第3回：カースト制度
- 第4回：食事
- 第5回：結婚
- 第6回：火葬
- 第7回：さまざまなカーストの民
- 第8回：ヒンドゥー教とイスラム教
- 第9回：ヒンドゥー教の神々
- 第10回：定期市
- 第11回：アルミ食器の行商人
- 第12回：バングラデシュの大洪水
- 第13回：ネパール山岳地帯の通行人
- 第14回：開発と援助
- 第15回：テスト

参考図書①：溝口常俊『インド・いちば・フィールドワーク』ナカニシヤ書店、2006. 1

講義題目と同名の書物がナカニシヤ出版から2006年1月1日に発売され、2月22日に全国図書館の選定図書に指定されました。内容は、北インド・サンディラ地区の全定期市(30カ所)を訪問した際の日記です。1)サリーの国へ、2)ロダウラ村、3)大市、4)ラクダ記念日、5)火葬、6)王様の市と娼婦の村、7)別れ、8)再会、の8章からなり、解説編として①カースト制度、②北インドの村落、③定期市、④ヒンドゥー教とイスラム教、⑤ヒンドゥー教徒の結婚、⑥インドの気候、⑦カースト社会の食事、⑧大道芸の裏舞台、を付けておきました。はじめての海外旅行がインドという学生さんの日記ものせてあります。

参考図書②：石原潤・溝口常俊『南アジアの定期市—伝統的流通システム』古今書院、2006.

9

インドをはじめとする南アジアの国々では、現在も多数の人々が農村で暮らしている。そこでは今なお伝統的な定期市(periodic market)が、商品やサービスが交換される場として、重要な役割を果たしている。本書は、こうした定期市に集う人々に焦点をあててカースト社会の実像と変容を明らかにする。筆者らは1984年から89年までバングラデシュ、西ベンガル、北インド、南インドの4箇所でそれぞれ30前後の定期市を訪ね、市マップを作成し、売り手、買い手に聴き取りした。その調査報告書である。

4地域の調査方法をほぼ統一したので、インド・バングラの定期市を比較検討することができる。このうち、北インド調査時の裏話にあたるのが前掲の参考図書①である。